



## 超実践マニュアル 肝胆膵脾

VERSUS 研究会 監修

小倉 明夫, 石風呂 実, 松原 馨, 對間 博之, 内田 幸司,  
船橋 正夫 編集



肝胆膵脾に代表される上腹部画像診断は、複雑な解剖・多様な疾患のため、非侵襲的である画像診断の最重要フォールドであろう。当然のことながら多種多様なモダリティが用いられ、多角的な診断が行われている。また、CT・MRI に代表される診断機器の進歩はめざましく、各

モダリティの撮像技術を up-to-date することは容易ではない。近年では、画像処理ワークステーションの進歩により驚くほど高精細な 3D 画像を作成することが現実的な時間で可能となった。しかも、本邦では必ずしも大病院に代表される特定機能病院でなくとも、そういった高精細な 3D 画像が手術支援等に応用される時代となった。他方、核医学領域では CT 装置と一体となった SPECT/CT 装置や PET/CT 装置の普及が進んでいる。核医学の機能画像に高精細な CT 画像が組み合わさることで、相乗効果を伴った融合画像診断が展開されている。

著しく進歩する高度な医療機器に適応した専門性の高い放射線技師のニーズは高く、各学会によって専門技師制度の整備が進められている。専門技師になるための教育・研修は、多くはモダリティ別に行われることが多い。これらが放射線技師のチーム医療における役割の向上に資することは明らかである。一方、平成 22 年 4 月 30 日の厚生労働省医政局長通知により、放射線技師の更なる役割として画像診断における読影の補助と検査説明・相

談が求められており、多角的な画像診断に対応できる放射線技師の養成が急務となっている。当然、それぞれのモダリティで得意・不得意があるが、時にそれらが患者の状態によっても変わる可能性があるため、臨機応変に対応する必要がある。したがって、モダリティを跨いだ、つまりは主として臓器別の疾患に関する多角的な画像診断の知識の充足が求められていると言える。

既に、肝胆膵脾の画像診断に関して数多くの良書があるが、マルチモダリティシンポジウム VERSUS が、これらの後を追ってこの領域に特化した書籍を刊行した意義は何か？それは、詳細な撮像技術の解説を伴った書籍がほとんど見当たらない点ではないだろうか。先に述べたように医療機器の進歩が著しいため、画像診断と撮像技術をセットで考える必要がある。本書を読み進めることで、基礎技術の確認のみならず最新の撮像技術を up-to-date しながら、かつ診断補助を行うにあたりおさえておくべき肝胆膵脾の画像診断の知識を体系的に学ぶことができる。特筆すべきは写真や図表が豊富であることから、知識を整理しながら頭に入れることができる。

本書は、最初に肝胆膵脾に関する解剖・生理を豊富なイラストをもとに学び、引き続いてモダリティ別で撮像技術と基礎的な疾患の特徴的な画像及び所見を学ぶ。モダリティごとに実際に検査説明に用いられている患者説明用の文書や同意書が掲載されている点は、厚生労働省医政局長通知の要求に応じなければならない現場のニーズを的確に掴んでいる。良質な概説の所々に Q&A 形式で注釈が加えられている。また、Q&A が目次になっており、急を要する疑問に短時間でアクセスできる。最終章では、CT と MRI のダイナミックスタディの物理的特性を実験に基づいて比較しながら、臨床における要点を整理することができる。

最後に、専門性と多面性という一見両立が難しい問題に取り組んだ本書が、経験の多寡によらず、1 人でも多くの医療従事者、(筆者のような)臨床を離れ教育に携わっている教育者、医療機器の開発者等に届くことを切望する。

(大崎 洋充 群馬県立県民健康科学大学大学院 診療放射線学研究科)

(ISBN 978-4-86003-101-5, A5 判, 336 頁, 本体価格 3,800 円 (税別), (株)医療科学社, ☎ 03-3818-9821, 2018 年)